

島根県におけるインターフェロン γ 遊離試験 (QFT) 結果 (2014 年度)

角森ヨシエ・川上優太・川瀬 遵・村上佳子・穂葉優子・佐藤浩二

1. はじめに

従来、結核感染の有無についての判定方法としてツベルクリン反応 (ツ反) が実施されてきたが、ツ反は感度が高い反面、BCG 接種歴や結核菌以外の抗酸菌などの影響を受ける。これに対して、結核菌特異抗原で血液を刺激し産生されるインターフェロン γ 遊離試験 (以下 QFT) は BCG 接種歴や結核菌以外のほとんどの抗酸菌の影響を受けない。

2005 年に対外診断用キットとしてクオンティフェロン TB-2G が販売開始されて以来、同試験は急速に普及し、接触者健診ではなくてはならない検査法となっている。

また、さらに 2009 年には、より感度の高い第三世代であるクオンティフェロン TB ゴールドの販売が開始されている。

当所において、QFT の検査依頼数は 2012 年度まで年々増加していたが、2013 年度は結核患者数の減少や試薬のリコールのため一時期販売停止となっていたことから検査件数は減少し、741 件を実施した。今年度は 764 件の検査を実施し、そのうち集団感染事例関連が 351 件であった。(図 1)

保健所の積極的疫学調査の結果と併せ、QFT 検査の陽性率について分析したので、報告する。

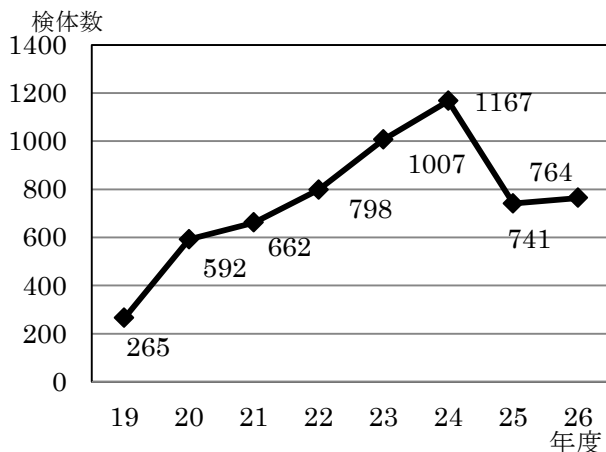


図 1 保健環境科学研究所での QFT 実施数

2. 材料と方法

保健所による積極的疫学調査の結果、QFT 検査依頼のあった 605 件 (接触直後の検査を除く) の検査結果

について、積極的疫学調査の情報と比較した。

3. 結果と考察

3. 1 結果 (集団感染事例関連を除く)

集団感染事例関連検査を除くと 362 件 (接触直後の検査を除く) の検査実施であった。

判定保留は 2013 年度 3.4% から 6.9% に増加したが、陽性は昨年度と同程度で 5.0% だった。(図 3)

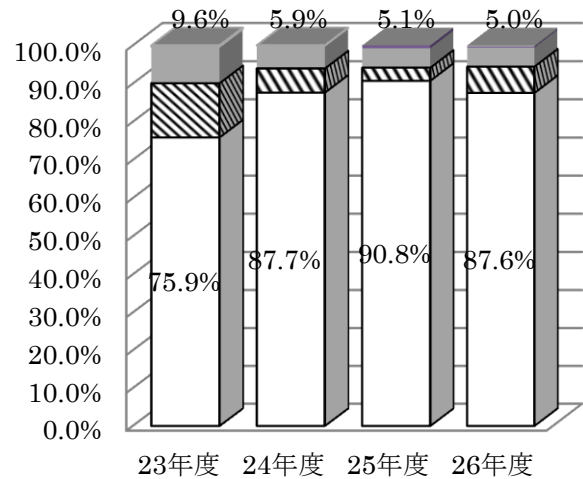


図 2 年度別 QFT 陽性率 (2 回実施の場合、接触直後を除く)

同居家族の QFT 陽性率が比較的高かった。

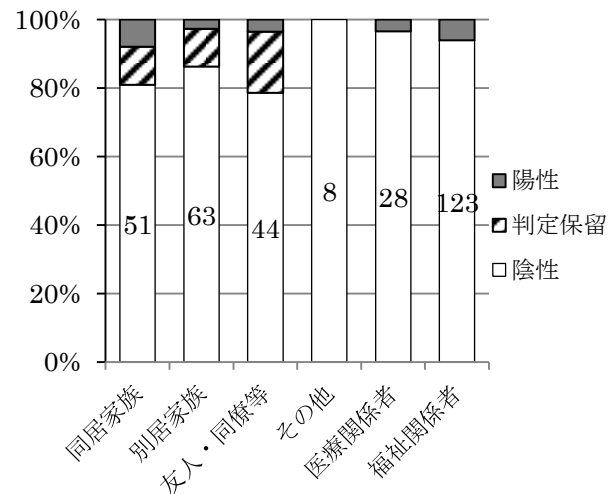


図 3 : 区別別 QFT 陽性率 (2 回実施の場合、接触直後を除く。集団感染事例関連を除く)

3. 2 結果（集団感染事例）

6月に松江市で集団感染（患者3名、無症状病原体保有者19名）があり、その関連検査を243件（接触直後の検査を除く）実施した。

接触者は比較的若年者が多かったが、陰性198人（73.5%）、判定保留24人（14.7%）、陽性20人（10.8%）、判定不可1人（1.0%）という結果だった。同居家族については3人全員陽性だった。（図4）

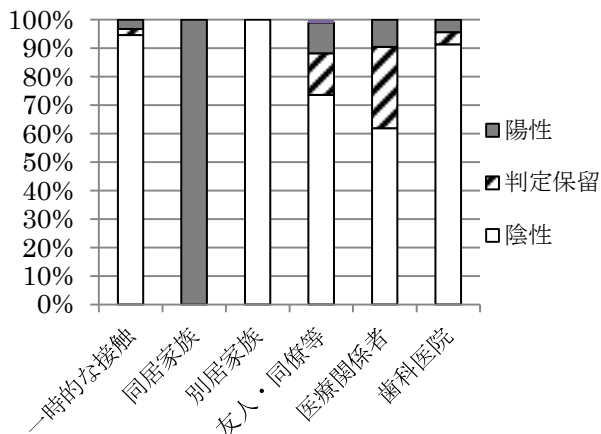


図4 区分別 QFT 陽性率（2回実施の場合、接触直後を除く。集団感染事例関連）

3. 4 考察

今年度、島根県において新規患登録者数は少なく、集団感染事例以外の検査は少なかった。集団感染事例関連の QFT 検査は 351 件実施した。結果的に QFT 検査数は昨年同様となった。

6月に松江市で発生した集団感染事例では、患者の診断が遅かったために感染が拡大したが、発症者は少なかった。

QFT 検査は過去の感染か最近の感染か判断できないケースが多いので、患者との接触内容、過去の結核患者との接触歴など考慮して総合的に判断する必要がある。